

50周年は、通過点

— 毎日の積み重ねを明日へ —

千葉県公共図書館協会

会長 中澤 正道

千葉県公共図書館協会は、昭和32年(1957)に創立され、平成19年に50周年を迎えました。県の文化会館で、記念行事を行ったことも皆様の記憶に残っているかと思います。

創立当初の加盟館は、17館で、当時の年間貸出冊数は、約35万冊でした。現在の加盟館は88館、貸出冊数は約3,250万冊ですので、それぞれ大幅な増加となっています。この数字は、図書館界の先人の方々が額に汗をして、営々と道を切り拓いてきてくださった賜物であり、この場を借り深く感謝するものです。

しかしながら、本県の図書館事情を概観いたしますと、まだまだ、多くの問題を抱えているように思われます。

その一つは、県内の図書館先進地帯とそうでない地域の格差があまりにも大きく、市の図書館設置率が約94パーセントに対して、町村の設置率は全国平均を大きく下回っているという現状は、公共図書館の一番の課題と考えています。

第2点は、団塊の職員が退職し、特に司書職の補充が十分になされていないことで、県立図書館もそうですが、嘱託職員が大量に採用されたり、業務委託、指定管理者制度の導入など、運営体制の急速な構造の変化が進められ、負の影響が懸念されます。

第3点は、インターネットに象徴され

る電子化、情報化の波と予算の関係です。

県内の図書館の情報発信能力は、高くなってきたものと思いますが、経費をそちらに取られ、肝心の図書費にかかる予算が減少しています。全国的な傾向といえ、それまでですが、やはり、きめ細かい図書館サービスを展開していく上で、図書費の確保は絶対必要なことです。

何とか、最低でも現状維持をしたいものです。

さて、これらの課題を抱え、今後図書館界は、どのような方向に向かうのでしょうか。

子ども読書活動推進事業など、単に図書館の活動ではなく、教育の根幹に係る極めて重要な事業の展開に当たっては、図書館員の皆様やそれぞれを結ぶネットワークが核となり、情報を発信していくことが大切です。

今後も、県内の図書館が協力して、それぞれの図書館の特徴を生かした、ネットワークを更に強固にして、よりよい図書館活動を目指して行くべきではないでしょうか。

(千葉県立中央図書館長)